

## 「級長の探偵」論 —— 文雄のアンコンシヤス・バイアス ——

小林和江

川端康成作「級長の探偵」は昭和四年三月に雑誌「少年倶楽部」に発表された児童向け作品である。先行研究としては、川端には珍しく少年向けを意識して書いているという指摘<sup>①</sup>のほか、失明した人が登場することから川端自身の体験に言及するもの<sup>②</sup>や、少年小説として適性不足であると作品全体の印象を述べるもの<sup>③</sup>などがある。千葉幹夫は『級長の探偵』（一九二九年）は心配りの齟齬が事件を巻き起こすのだが、最後は温かい心が読者をなごませる」とし、物語の中心に「心配りの齟齬」があることを指摘しているが<sup>④</sup>、作品内容に深く踏み込んではいない。長谷川潮は、児童文学で描かれる障がい者について考察するなかで、「川端が失明した少年の物語を書いたこと自体には注目したい。」と述べるが、設定が苦しく実際に成り立つ話なのか疑問であるとして、「作品そのものは高く評価できるものではない。」と述べている<sup>⑤</sup>。

単行本『級長の探偵』を取りあげている大阪国際児童文学館「日本の子ども一〇〇選」<sup>⑥</sup>では、「級長の探偵」は次のように紹介されている。

表題作「級長の探偵」は、収録中唯一の少年向け作品になっている。不意の事故で盲目になった清一は、学校に通えなくなったが、障害を乗り越えようと一生懸命努力をする。それを知った級長の文雄が学校で学んだ事を毎日、清一に教える。ある日、学校の実験室の機械が壊れたり、盗まれたりする。文雄は清一を犯人と疑うが、犯人は校長先生で、勉強熱心な文雄を助けるためであったことが分かり、二人の友情は壊れることなく続く。

この解題のとおり「級長の探偵」は、まずは友情回復の物語として読める。だが、作品の題名が「級長の探偵」であるのはなぜなのだろうか。確かに級長である文雄は、級友たちと犯人が誰なのか意見交換をするし、清一が犯人ではないかという自分なりの考えを持つ。しかし、犯人は校長先生だったため、結局、文雄は探偵として失格である。その失格の「級長の探偵」が題名に選ばれているのだ。

本論では、「文雄がなぜ友人を犯人と思ったのか」に着目することで、単なる友情回復物語だけに終わらない、この作品の奥行と魅力を探りたい。

なお、引用は『川端康成全集 第十九巻』（新潮社、一九八六年一月）により、漢字はすべて新漢字に統一した。また、現在では差別的ととられる言葉を使用しているが、原文を尊重してそのままの表記としている。

## 一 作品概要

小学校で理科の実験器具が壊され、レンズが盗まれるという事件が起きた。発覚したのは月曜日の朝で、土曜日の授業の後、誰かが実験室に入り器具を壊し、レンズを盗んだのではないかと押本先生は言う。級長である文雄は先生から生徒同士でよく調べるように言われ、あれこれ考えをめぐらせる。一番に疑われるのは、先生が土曜日に実験をしていたのを見たと言っていた小使さんの子どもの新吉で、次が実験室の鍵がしまわれている場所を知っている自分だ。他に考えがうかばず、帰っ

たら前級長の清一に尋ねてみようと思う。

清一は文雄が信頼する友人で夏休みの初めに失明した。努力して家の中だけでなく村中歩き回ることができるようになり、夏休みが終わると学校へも行けるようになった。しかし先生から学校へ来るのは危ないと止められ、代わりに毎日文雄が清一に授業内容を話しに行っている。そのなかで不思議なことがあった。文雄が話していない光の実験について、清一が自分の手でやってみたかのように話したことだ。それを思い出し、文雄は実験器具を壊したのは清一ではないかと疑う。放課後清一のもとへ行くと、また清一は、行われなかった今日の実験について話をした。文雄は驚き清一が犯人だと思いつき、先生に報告するかどうかを悩みながら過す。

事件発覚から一週間後にあたる次の月曜日、犯人が判明する。器具が壊れた土曜日に校長先生が清一に対して理科の実験をしてみせ、その後で机をひっくりかえし壊してしまった。校長先生はその後不在で、戻ってきたこの日にすべてを話し明らかにしたということだった。文雄は清一に疑っていたことを謝り許しを求め、清一も校長先生との実験を隠していたことを謝る。

以上があらすじとなる。登場人物は、級長の木村文雄、前級長の清一、押本先生、校長先生、清一の母、水野新吉、大川ほか級友たちである。事件が発覚した月曜日の理科の授業前から始まり、文雄による清一の行動を回想する場面を挟んで、事件について清一に伝えた放課後、一週間後の理科の授業、仲直りの放課後まで、時間の経過としては一週間である。

「月曜日には楽しい理科があります。」(一一頁) という一文で始まるこの作品は、理科の実験器具が壊されるということ扱っているため実験内容が詳しく描写されている。「少年倶楽部」という児童向け雑誌に書かれた作品なので、教育的な内容

を含むよう配慮がみえる<sup>9)</sup>。また主人公たちは小学校六年生で、歴史や理科などの学科は、「これまでの低学年の学科とは、また違った深い興味をそそるものであり、幼い世界が急に拡つて、長い年月の歴史と広い自然界との扉に手を掛けたといふ喜びを見童達に与へるものであり、その上、いかにも自分達が上級生になったと思ふ誇りを感じさせるもの」(一一―一二頁)と書かれ、読み手である子どもたちの自尊心をくすぐり、同時に勉強のおもしろさを説いている。

## 二 清一について

文雄が事件の犯人ではないかと疑った清一はどのような子どもだったのか。清一の行動を追いながら彼の性格をみていく。

清一は前級長で、文雄の親友である。夏休みの初めに稲の葉で目に傷を負い失明した。自分よりも嘆く母親を心配させまいとし、家の中から村中へと行動範囲を広げていき、馬に乗って村の案内役もできるようになった。失明以前と同じように学校にも通うつもりで、母親に教科書を読んでもらい、地理や歴史は暗記するほど勉強面でも頑張りを見せている。

「お母さん、目が見えなくなつたつて、僕はどんな目明きにも負けませんよ。」(一九頁) という清一の言葉と、以前と変わらず行動できるように努め、学校の勉強も継続している様子から、彼が母親思いの優しい子であり、負けず嫌いで勉強熱心な子どもということが読者にも伝わってくる。失明したことに対して嘆いたり恨んだりするようなマイナスの感情は描かれておらず、これも負けず嫌いの性格を裏付けているといえよう。

やがて夏休みが終わり学校に行き始めたが、先生から危険だからと来ることを止められ、かわりに文雄が学校で習ったことを毎日話しに来ることになる。

文雄は清一に授業内容をすべて話していたが、ひとつだけ話さなかったことがあった。光の実験についてである。しかしその内容を、

「君はこの間から、理科の話をちつともしてくれないぢやないの。」

と言ひ出したので、文雄がぐつとつまつてゐると、

「今日も理科の時間があつて、先生に光の屈折の実験を見せて貰つたぢやないの?」

「えつ、誰に聞いたの。」

「誰にも聞きやしないけど、僕は目玉が四つもあるんだもの。君が学校で今日教はつて来た実験の話を僕してみようか。間違つてたら直してね。(後略)」

(二三頁)

と、清一は詳しく語り始めた。さらに事件発覚の月曜日にも、電流の実験について文雄が言い出す前に、「今日理科の時間にどんな実験があつたか、僕あててみようか。」(二五頁)と、また清一から話を始めた。実は清一は、止められていた学校へこっそり行き、実験の授業を聞いていたからである。このことは事件解決にあたる次の月曜日、押本先生の話で明らかにされる。

「(前略) 土曜日に、校長先生が一旦お宅へ帰られてから、校長会議に持つて行く書類を忘れたことに気がついて、また学校へ引き返していらつしやると、標本室の窓の下の道に立つてゐる少年がある。見れば、諸君の級長だつた清一

君だ。押本先生が実験をしていらつしやるから見てゐるのだと、清一君は云つたさうだ。その時はもう実験が終つてゐたのだが、盲の悲しき、私がゐなくなつたのも知らずに、窓の下にちつと立つてゐるのだ。水車で米を搗いて来た帰りらしい。それ程理科の実験が見たいかと、校長先生がお訊ねになると、はい、いつか通りがかりに、光の屈折の講義を一時聞いたとの清一君の答へだ。その勉強心に感激された校長先生は、清一君を標本室に連れ込んで、実験を見せてあげられたのだ。(後略) (二六—二七頁)

清一は文雄に対し、理科の実験を語ることで文雄たちと同じように勉強ができてゐることを示そうとしたのだろう。ただ、押本先生の授業を窓の下から聴いていたこと、校長先生に土曜日の二時過ぎに実験をしてもらつたことを黙っていただけである。負けず嫌いで勉強熱心という清一の性格を表す行動だったが、これが原因で清一は文雄に疑われることになる。

### 三 文雄の心情

次は疑つた文雄の側から、彼の心情を中心に出来事を追っていく。

まず、実験器具が壊されるという事件が発覚し、先生から犯人を調べるよう言われた時に文雄が考えたのは、

——皆の疑ひは、第一に新吉君にかかつてゐるにちがひない。新吉君は小使さんの子供だし、先生の実験を土曜日に見たと言ふのだから。その次に疑はれて

あるのは、自分にちがひない。級長は先生と一緒に器械の出し入れをして、鍵のあり場を知つてゐるのだから。——とにかく帰つたら直ぐ、清一君に相談してみよう。清一君は目が見えなくても、何でも見えるんだから。(一五頁)

ということだった。文雄は清一のことを信頼している。前級長でもあり、授業内容を話しに行つてゐるから相談もしてみよう、という考えである。しかし、このすぐ後、清一について文雄が回想する第二章が始まり、そこでは清一に対して文雄が「口惜しい」という感情を持つていたことを示す場面がある。清一が失明して間もない頃、文雄の泣き顔を、見えないはずの清一が見抜くところだ。

「見なくても分るよ。おとなしい君が大川に勝つたなんて……。」

「負けても勝つたんだよ。」

「僕だつて、見えなくても見えるんだよ。」

「ねえ、清一君、大川の奴つたら、僕に言ふんだよ。清一君が学校へ来なくなつたから、君は級長になれて嬉しいだらうつて。口惜しいから、僕いきなり殴つちやつたんだよ。そんなこと、そんなこと僕思つてやしないよ。」

と、文雄は思はず知らず、清一の手を握りしめて、

「そんな卑怯な僕だと、君は思やしないよね。そりや、僕だつて、五年からずつと君に負けてゐるのは口惜しいし、一番になりたいとは思つてゐたけれど、そんな、そんな——。(二六頁)

この文雄と清一との会話で、文雄が五年生の時は「負けてゐるのは口惜しい」と思つてゐたことが明らかになる。信頼だけではなくライバル心も持つような関係性が

示される。そして、級友大川を殴つたことには、級長になったことへの文雄の葛藤が表われている。

文雄が大川を殴つたのはなぜか。それは大川が言つた「清一君が学校へ来なくなつたから、君は級長になれて嬉しいだらう」という言葉に反応したからだ。級長になれたのは清一が不在だからだ。つまり清一がいたら文雄は級長になれない。清一よりも劣ると言われているのと同じである。では文雄はこの指摘に対して口惜しいから殴つたのか。清一に劣つてゐることは文雄も認めてゐる。五年生の時から「負けるのは口惜しいし、一番になりたいとは思つてゐた」と言つたのだから、清一に劣つてゐたと自分でも思つてゐる。大川にそれを言われたとしても、「おとなしい君」と清一に言われるような文雄がこの理由で殴るとは考えにくい。

それよりも、大川の「嬉しいだらう」という言葉に、人間性を否定するような意味合いを感じたのではないか。清一の失明が背景にあるにもかかわらず、自分が級長になったことを喜ぶ人間だと思われていると感じたから殴つたと考えられる。文雄の清一への言葉に「そんな卑怯な僕だと、君は思やしないよね。」とあるように、大川に卑怯者だと思われたと感じて殴つてしまつたのであり、清一の失明を自分が級長になる好機だと思つたのではないと表明するための行動だった。

文雄が級長になつたことは、清一が不在となり二番手の文雄がなるのだから順当なことである。しかし不在の理由が清一の失明で、それを「嬉しいだらう」と大川に言われたことで、普段ならケンカや人を殴るようなことをしないと考えられる文雄が殴つてしまつた。このエピソードは、清一の失明のうえに成立する自身の立場の変化に対して、文雄が抱いてゐる葛藤を効果的に表わしている。

この出来事に加えて、光の実験について文雄が語らなかつたところにも、文雄の清一に対する思いが表われている。

(前略) 学校で教はつて来たことを、唯の三度だけ、清一に話さなかつた時のことでした。——学校で教はつて来たことは「光」でした。

「光の反射」「平面の鏡」「光の屈折」——理科のこの三課だけを、文雄は清一に話す気になれないのでした。盲とは光を見ることが出来ない者のことです。

光を失つた者のことです。

「光の話をして、清一君を悲しませまい。」(二二頁)

清一に対する文雄の優しさ、思いやりを表す場面である。しかし、悲しませないために話さないという文雄なりの配慮をしたのに、清一は実験を知っており自分から話した。この場面は事件が起きる前であり、ここでは「堪忍してね。話さないのは僕が悪かつた。清一君は熱心だから、心の眼でなんでも見てしまふんだね。」(二三頁)と、文雄は、「清一君は熱心だから」と感心している。ところが、事件が起きた今、この実験を清一が語つたことを思い出すと、勉強熱心であるからこそ、清一が犯人ではないかと思ひ込む原因となつてしまった。

文雄は思い込んだまま、この後さらに清一への疑いを深めることになる。事件後清一の家に行くと、文雄が何も言わないうちに、清一から行われなかつた理科の実験の説明がされる。

「実はその実験は、今日出来なかつたんだよ。」

と、文雄はもうぶるぶる顫へてゐます。

「土曜か日曜に実験室へ入つて、器械を毀した上に、凸レンズを盗んだ者があつたんだよ。」

「ええ。」

と、今度は清一の顔が、さつと草の葉のやうに蒼ざめたではありませんか。「僕頭が痛い。さよなら。」

と、文雄は清一の呼び止めるのも聞かずに、一散に自分の家へ駆け込んで、わつと大声に泣き出してしまひました。——清一君は研究心のためとは云へ、なんとといふ恐しいことをしてくれたのだらう。しかし、二人とない親友を、どうして訴へられよう。でも、級長として、級全体のために訴へずにすむものか。そして文雄は唯悲しいのでした。(二五—二六頁)

そしてこの後一週間、文雄は清一のところに行かず、清一が犯人だと先生に報告するかしなないかで悩み続ける。

文雄の心情の経過を見ていくと、前級長であり、失明しても勉強熱心で努力家の清一を、「何でも見えるんだから。」と信頼していた。しかし、その勉強熱心であることから、実験器具を触り壊したのは清一ではないかと疑う。さらに清一が再び実験について話すことで、疑いを確信に変える。

清一は事件のもとになった実験を詳しく話したのだが、そもそも事件の犯人が自分からその事件のもとになる出来事を話さざらうか。そういった人物を犯人ではないかと疑うのはおかしくないだろうか。しかし文雄は疑つた。そして犯人は清一ではなく校長先生だったため、「級長の探偵」である文雄の推理は間違つていたことになる。

「級長の探偵」は、疑うべきでない人物を疑つて犯人と思ひ込んでしまう物語であり、失敗した探偵の物語である。探偵としては失格だが、結果的に友情は回復するので、これまで専ら友情の回復物語として読まれてきたが、このとき、私たちは

大切な部分を見落とすことになっていないだろうか。次章では、文雄がなぜ清一を犯人だと思いついたのかに焦点をあてて考察する。単なる友情回復物語で終わらない「級長の探偵」の奥行と魅力が見えてくるはずである。

#### 四 文雄の思い込み

教室で実験を見せて貰へないだけに、そしてあんなに勉強心が強いだけに、尚一層器械を自分で扱ってみたいにちがひありません。

「ああ、もしあの気の毒な親友の清一君だったら……。」

と思ふだけで、文雄の胸はもう痛むのです。(二四頁)

光の実験について自ら語った清一に対して、負けず嫌いで勉強熱心であるからこそ実験を行い、実験器具を壊したと文雄が解釈している場面である。

文雄が清一を犯人だと疑った根拠は、自分が話さなかった実験と、事件のため行われなかった実験を、清一が自分から先に話したことである。そこには文雄の清一に対する、「教室で実験を見せて貰へないだけに、そしてあんなに勉強心が強いだけに、尚一層器械を自分で扱ってみたいにちがひありません。」という思い込みがあった。そして文雄の疑いは確信に変わる。「器械を壊した上に、凸レンズを盗んだ者があるんだよ。」と話した時、清一の顔がさっと蒼ざめた。それを見て文雄は、実験を行ったのはやはり清一で、目が見えないから実験器具を壊してしまった、勉強熱心がゆえにレンズを盗んでしまったに違いない、と思いついてしまふ。

実験器具を壊しレンズを盗んだ者が、その実験についてわざわざ自らが語るとい

う不自然さを見落とし、勉強熱心な清一なら実験したに違いないという思い込みだけで、犯人だと決めつけてしまった。そして「ああ、もしあの気の毒な親友の清一君だったら」と思っている。

文雄が清一を「気の毒」と考えるのはどういう点についてなのか。まず、級長としてクラスを中心にいるような人物であった清一が、日常生活にも努力が必要な状況になってしまったことに対してのことがあげられる。「他の子供とは十倍の努力と勇気が、必要だったにちがひない」(二三頁) 清一に対して、「この清一のけなげな心を一番よく知つてゐるのは、言ふまでもなく両親と、それから文雄でした。」(二二頁) と語られるように、文雄は清一の姿をずっと見ていた。知っているからこそ清一のことを「気の毒」だと思っている。

この思いは、光の実験を「光の話をして、清一君を悲しませまい。」と考えて話さなかったことにも表われている。これは文雄の優しさであり、同情ともいえるが、「気の毒」という思いが文雄にあるからこそその行動だろう。また、大川を殴った出来事では、嬉しさの中の葛藤が表れていた。文雄は、級長になった現在の自分や、清一に勉強を教える立場になった今の状況の発端が清一の失明にあること、清一が以前のままであれば自分は級長になれなかったこと、清一に起きた「気の毒」なことのうえに自分の級長という立場があることを負い目と感ずることで、ますます「気の毒」という思いが強くなる。

文雄が清一を犯人と思いつながらも、一週間先生に清一が犯人だと言えない理由にも、清一に対する文雄の配慮がある。「二人とない親友を、どうして訴へられようでも、級長として、級全体のために訴へずにはすむものか。」と悩む。この「二人とない親友」である清一は、文雄にとって失明した「気の毒」な清一である。だからこそそんな彼を告発することはできないと悩んだ。

清一は失明する以前と同じ行動をとっているだけである。見えなくなっても以前と同じように行動するために努力は必要だったが、清一にとって今の自分は、他人から「気の毒」といわれるものではない。負けん気の出どころは生来の性格、自分のために泣く母に対しての思い、自分を見る目が変わった周囲に対しての反感、自分を鼓舞するための力と、いろいろと想像できるが、少なくとも清一は目が見えない自分のことを「気の毒」な存在だとは思っていないし、こういった努力を「気の毒」と思われることだとは思っていない。

清一が「気の毒」な人物だと他者が決めつけることはできない。この決めつけは偏った思い込みである。文雄は清一に対する負い目を感じており、向学心のある清一が実験を教室で見られないことは可哀想だという気持ちを持っていた。失明したことは「気の毒」であり、見えないから実験器具を壊した犯人となってしまう「気の毒な親友の清一君」という思考によって、犯人が自分からその事件のもとになる出来事を話題にするはずがないという、単純に気づくはずのことに気づけなくなっていた。偏見が文雄の目を曇らせていたのである。

勉学心が強く、負けず嫌いで何事にも努力をする清一の姿に文雄は励まされ、「清一が学校へ行けなくなっても、少しも力を落してゐないらしいのが、何より嬉しい」(二〇—二二頁)と思っていた。しかし、そう思っていた文雄だけが清一を疑った。級友たちは「清一のことなどは、思ひ浮べようとする者さへない」(二五頁)という状況の中、文雄だけが清一を犯人だと疑った。現在の級長は自分だから、犯人を見つけなければいけないという焦り、これがますます文雄を清一が犯人という思いを強くさせているようにも感じられる。間違った推理を進めていく級長を描くことになり、「級長の探偵」というタイトルに込められた皮肉が明らかになってくる。

「目が見えない清一」として文雄は清一をとらえ、「気の毒」だと思っている。

清一の失明にこだわるから、文雄は級長になったことを負い目と感じる。清一の勉学心も失明をきっかけにより強くなったと思いい、「研究心のためとは云へ、なんといふ恐いことをしてくれたのだらう。」と、実験をしたに違いないと思ひ込む。清一の「目が見えないこと」への文雄の過剰反応と考えられる。しかし、勉学心のあるなしは、目が見えるか見えないかは別問題である。このことは作中、押本先生から伝えられた校長先生の言葉で語られている。

——しかし、清一君の心がけは、実に見上げたものだ。目明きの諸君にも、見習つて貰ひたい、勉強心だ。この精神があれば、目のあるなしなどは問題でなく、きつと目明き以上に立派な仕事をし、偉い人間になるにちがひない。(二七頁)

「目のあるなしなどは問題でなく」と校長先生は語る。この言葉は「目がみえないこと」ととらわれたことで苦しんだ文雄を通して、読者へ思い込みの危険性を伝える作者からの直接的なメッセージと読めないだろうか。

##### 五 「級長の探偵」の現代性

近年、アンコンシャス・バイアス(無意識の思い込み・偏見)の存在が社会的問題となっている。自分が気づいていない、無意識の思い込みや偏見が、自分を責めさせたり、他人に対する言葉の暴力や差別を生んだりすることであり、これ

は障がいをもつ人に対しても存在するといわれる。社会心理学者の北村英哉は、「障害をもつ人は支援が必要な存在である」、「障害者はみな、心の美しい人たち」というバイアスがあることを指摘している<sup>⑧</sup>。現代社会で指摘されるこの問題が文雄にもあてはまる。「目が見えない清一」を「気の毒」とする文雄の思い込みは、障がいをもつ人に対するバイアスの一つだろう。そして、解決する一番いい方法として北村は、「変なバイアスがなく、より現実的な事実と向き合い、一人ひとりの相手ときちんと出会って、その人の独自性を認めて、ていねいなコミュニケーションを行なうということに尽きる」と提示しており、これは作品の終盤で「目のあるなしなどは問題ではなく、勉強心のあるなしが問題の本質であることを説く校長先生の言葉にそのまま重なるものである。

「級長の探偵」は

「清一君、許してくれ給へ。疑って僕が悪かった。」

「僕こそ、校長先生に御迷惑だと悪いと思つて、隠してたんだから、堪忍してくれ給へ。君の友情を失つたら、僕は心の光まで失ふところだったよ。」（二七頁）

と締めくくられるのだが、文雄がもし自分の思い込みのまま清一を犯人として名指ししていれば、清一は深く傷つき、二人の友情は壊れて、清一は「心の光」までも失ってしまったかもしれない。黙って悩んでいた文雄が、疑ったことを謝り、清一も隠し事をしていなかったことを謝るこの仲直りの場面は、この物語が友情回復の物語であるという印象を与える。しかし「目が見えないこと」にこだわり、それを「気の毒」と思い込む気持ちが、友人を犯人と疑う原因となっているという、文雄のア

ンコンシヤス・バイアスに焦点を当てると、この「友情回復」は根本的なところが未解決である。「気の毒」という思い込みがなくならなないと、同様のことが起きる可能性は残っている。実験器具が壊れたことは解決したものの、無意識の思い込みはすぐには解決するものではない。

「級長の探偵」は未解決の部分を残した物語である。皮肉なタイトルと、校長の「目のあるなしなどは問題でなく」という言葉によって、読者にも思い込みの存在を気づかせ、それをどう捉えていくかを考えさせるものになっている。探偵役は文雄から読者である子どもたちに引き継がれているのではないだろうか。

文雄が持つ「目が見えない人は気の毒だ」というアンコンシヤス・バイアスに焦点を当てて読むことで、「級長の探偵」は、単なる友情回復物語に収まらない、無意識の思い込みの危険性を考える物語になる。昭和四年に書かれた作品であるが、現代にも通じる課題を含んだ作品といえよう。

注

① 羽鳥徹哉は、「川端康成解説」『日本児童文学大系 第三卷』（ほるぷ出版、一九七七年一月、四七六頁）で、「川端が純粋に少年向けを意識して書いたのは「級長の探偵」ただ一作である。」と解説し、「この作の中心は、何といつても、盲目という悪条件に決して負けようとしない、清一少年の気魄と勇氣である。文雄の思いやりと友情である。」「しかし、清一の勇氣は、やや大げさで不自然だ。探偵といったって、文雄がただ一人で気をもんでいるにすぎない。」と述べている。

② 村松定孝は「川端康成の児童文学『級長の探偵』鑑賞」『国文学解釈と教材の研究』一六巻一四号、一九七一年一月、一三三頁）で、見逃せないこととして、

盲目である清一について、「盲目の少年清一の生活が子供たちの日常に解けこみ、つねに優位に作用している点である。これは作者の盲人の祖父と二人きりで過した体験が盲人を単に哀れな存在として類型化せず、盲人なりの強い生き方をとらせることになった」と指摘する。

③ 二上洋一「川端康成の少女小説」(『日本児童文学』二七巻三号、一九八一年三月、六三頁)は、「級長の探偵」はよくできた話ではあったが、少年小説の持つ力強さ、パンチ力不足を露呈して、少年小説の適正と合致できなかった」とする。

④ 千葉幹夫『童話』から『児童文学』へ(『日本の童話名作選 昭和編』、講談社文芸文庫編、二〇〇五年七月、三〇八頁)。

⑤ 長谷川潮『児童文学のなかの障害者』(ぶどう社、二〇〇五年十月、七四頁)。

⑥ 級長の探偵／財団法人大阪国際児童文学館 子どもの本二〇〇選 一八六八年—一九四五年 (<http://www.icilo.or.jp/100books/1868/frame082.htm>) 二〇一二年六月二一日閲覧。

⑦ 中嶋展子は、「川端康成の少女小説—『少女倶楽部』掲載作品の素材を中心に」(『岡大國文論稿』岡山大学言語国語国文学会編、二〇〇九年三月、五七—五九頁)で、雑誌「少女倶楽部」掲載作品で川端が取り入れた「資料」を考察している。その中で「少年倶楽部」掲載の「級長の探偵」についても言及し、この作品で理科の教科を取り入れた事が契機となって「少女倶楽部」にも取り入れられるようになったと述べ、『尋常小学理科書 第六学年教師用』(大正八—十二年、文部省)が参考にされたとしている。

⑧ 北村英哉『あなたにもある無意識の偏見 アンコンシヤスバイアス』(河出書房新社、二〇二二年七月、七五—七六頁)。